

序文

鈴木球子

フランスの十八世紀は、長らく「啓蒙」という枠組みで捉えられてきた。理性の光によって迷信や偏見の闇を打ち払い、教会に代表される伝統的権威や旧来の思想を批判的に検討したという「啓蒙」についての説明は、よく知られている。そして、啓蒙や人間の理性、進歩主義への期待は、未だに根強く存在する。「啓蒙主義の理念を二十一世紀の言語と概念で語り直そうと」⁽¹⁾試みる、二〇一八年に出版されたステイーブン・ピンカーの著書『21世紀の啓蒙』の副題「理性、科学、ヒューマニズム、進歩」は、そのことを示している。その一方で、十八世紀や「近代」と呼ばれる時期の再考は、これまでに多くの研究者によって行われてきた。「理性主義」のみに注目する捉え方は、近年減少していると言えるだろう。反啓蒙、非理性、あるいはアンチ・モダンやポスト・モダンなど、様々な言葉を耳にする。『啓蒙の百科事典』の「総論」で長尾伸一は、二十世紀以降の世界大戦やグローバルな格差などを経て、近代社会の在り方への疑念や「人間中心主義」からの脱却の試みが広がったことと、啓蒙への批判が広がったこととの関連性を指摘し、「現代の思想が『啓蒙』と『反啓蒙』の対立を巡って展開し

ているようにさえ見える」と述べている。こうした「対立軸」の形成が、近代という時代を見直し、考察するための重要な転換点になったのは事実であろう。だが、近代社会への疑念から「反啓蒙」という考えが導きだされたこと自体が、啓蒙と近代との直線的かつ不可逆的なつながりを想定しているわけで、この対立は実は表裏一体の関係にあるように思われる。

啓蒙時代というのは、厳密に言えばあいまいな区分であるが、一般的には「ルイ十四世の死（一七一五年）から革命の勃発（一七八九年）にいたるあいだの十八世紀のおよそ七十五年間」を「啓蒙の世紀（Le Siècle des Lumières）」と呼ぶだろう⁽⁴⁾。しかし、理性についての言及は、むしろこの時期以前にも行われてきた。古くはその源を古代ギリシャの *dianoia* にまで遡ることができるし、あるいはラテン語は *ratio* の語を充てた。ミシェル・ドゥロン監修の『ヨーロッパ啓蒙辞典（*Dictionnaire européen des Lumières*）』は、「悟性」と「理性」は固く結びつく二つの概念であったと述べた後で、もともと後者がより「高尚」で「包括的」なものであったとする。理性はより「一般的」であるとされるが、「アリストテレス派とストア派の伝統では、（理性は）まさに理論的・実践的規範を司る『正しい理由（*recta ratio*）』であり、したがって高い審級⁽⁵⁾」であったとも述べている。そして、「この反省的思考と観想的思考、つまり至高の諸原理を知ることとの間の分離は、啓蒙の思考——スコラ学派の思潮においても、デカルト派の思潮においても——の基礎となっている⁽⁶⁾」とする。

「悟性（*Verstand*）」と「理性（*Vernunft*）」を明確に区別し、後者をヒエラルキーの上位にした上で、「啓蒙」と強固に結びつける一つの転機になったのは、カントである。彼は人間の認識とは、五感から入ってきた情報を時間と空間という形式によってまとめあげる直観の能力としての「感性」と、概念に従って思惟する能力としての「悟性」に基づき、より高次の「理性」によって総合的な（統一的な）像としてもたらされるものだとした。

我々の一切の認識は、感性に始まって悟性に進み、ついに理性に終るが、直観の供給する素材を処理して、

思惟の最高の統一に従わせるものとしては、理性より高いもの〔認識能力〕は、我々のうちには見出せない。⁽⁷⁾

カントが後世に与えた影響は大きい。彼が一七四八年に刊行した小論文「啓蒙とは何か」の中で、啓蒙を「人間が自ら招いた未成年状態から抜け出すこと」⁽⁸⁾と定義したのは有名であるが、ピンカーは先述の本の第一章の冒頭でこれを引用する。⁽⁹⁾とくに宗教に関する事柄においてカントはこの啓蒙について語り、啓蒙を実現するために「理性を公的に使用する自由」⁽¹⁰⁾を求めた。

カントは人間の認識能力を慎重に見定める。人間は「物自体 (Ding an sich)」を認識することはなく、理性は感性の先天的な形式としての時間と空間を介することによって、経験的な「物 (Ding)」という認識を生み出すことが可能になる。ところで、カントより前——例えばデカルト——においても、この「人間の認識能力の範囲」という問題は、重要な位置を占めていた。デカルトは理性あるいは良識を「この世のものでもっとも公平に配分されている」「真実と虚偽とを見わけて正しく判断する力」⁽¹¹⁾と定義する。理性は「自然の光」とも呼ばれ、「自然の光、即ち神から我々に与えられた認識能力」は「この能力によって捉えられるかぎり」〔……〕真でない対象をとらえることは、決してあり得ない⁽¹²⁾とされる。ところでデカルトは『精神指導の規則集』において「人間の認識とは何か、そしてそれがどこまで及びうるかを問うこと」⁽¹³⁾の重要性を説いている。山田弘明は「デカルトの合理主義について」において、この哲学者が理性の限界を認めていたことを指摘する。そして「理性の限界を画するということは理性の弱さを示すのではなく、反対に理性の拡張を意味する」⁽¹⁴⁾。カントにおいても同様のことが言えるのではないだろうか？ つまり彼の方法は、知の探究を人間の認識能力のうちに限ること、理性を介さない知の在り様を考察の対象とはしないことに繋がっていくのではないだろうか？ とところで、本書が目に向けたと思うのは、まさにこの理性による認識の周縁部分なのである。理性がとらえきれないもの、言いさえれば理性主義の領域の外にあるものは、人間の知として注目されることはなかったのだろうか？

ここで視座を変えるために、「啓蒙」という枠を一旦離れよう。そもそも私たちは、これまでの考察の中で一七一五年を越え、すでにデカルトにまで遡ってしまっている。フーコーのように、古典主義時代という言葉を用いたほうがいいのだろうか？ フーコーは『狂気の歴史』で、十七世紀における「非理性」の閉じ込めや、十八世紀における理性を理性たらしめる根拠としての「非理性」の扱いについて語った¹⁶。ところで、実際にヴァンセンヌやバステイーユの監獄に入れられ、最終的に精神病院に收容された、まさに非理性の一つの例と見なされるであろうサドは、彼の作品に登場する放蕩者たち^{リベルタン}に、時に平然と理性を語らせたのだった。例えば、『ジュリエット物語』において、女主人公はローマ教皇に向かって、迷信に対する理性の勝利を語り、彼の権威は近いうちに失墜するであろうと告げる¹⁶。一方で、不思議な術を使い、未来を予言する魔女と呼ばれる女性と出会った時、ジュリエットは彼女を退けようとはしない。彼女はただ魔女に向かって「私たちはあなたのことが分からない¹⁷」と告げ、そして最終的に彼女からの愛を受け入れる。ここで私たちは再び「認識」の問題に直面する。つまりサドにおいて、己が認識できないものを受け入れることは、必ずしも神秘主義への回帰を意味するわけではないし、理性を有することと対立するわけでもないのである。

フーコーはサドを、一世紀以上も前から監禁され沈黙させられてきた「非理性」が「欲望」として再び現れる時点で位置づけられるとし、彼の全作品は非理性の閉じ込められた場所のイマージュ（城や地下室、修道院など）に支配されていると述べる¹⁸。こうしたサド的な建物の中には、これまた閉鎖的な閨房や小部屋が多数存在するが、これは当時の貴族たちが愛を育んだ「別宅」や、フラゴナールが描く「門」の場面を思い起こさせる。ところで、ジュステイーヌ物語の最後において、ヒロインの住む建物の「窓」から雷が飛び込んでくることを忘れてはならない。それが示すものは、もはや「人間」の非理性的な行動ではない。雷の暴力性は閉鎖空間を貫き、——つまり開かれたものにし——理性／非理性の対立を凌駕する。ところで、ジュステイーヌはこの雷による己の死の到来を予感していた。

しかしふいに彼女の気分が変わり、その原因は検討もつかなかった〔……〕。彼女は友人たちに囲まれているときも、時に泣き出す有様だったが、自分でも涙の理由を説明することができなかった。⁽¹⁹⁾

プレイヤード版の『美德の不運』の注は、「予感 (pressentiment)」は暗黒小説の重苦しい雰囲気を醸し出すのに使用されるとした後で、「予感」を偏見とみなすことを否定する言説の例を挙げている。⁽²⁰⁾ そのうちの一つが、『百科全書』のデイドロによる「神智論者たち (Theosophes)」の項目であり、「予感に合理的な説明を供した」とされる。⁽²¹⁾

私たちは皆、予感というものを持っていて、それは私たちが洞察力や経験を身に着ければつけるほど、より正確で迅速なものとなる。〔……〕なんらかの現象が先行し、伴わない出来事はない。これらの現象がいかにほかになく、瞬間的で、微妙なものであっても〔……〕優れた感受性を持った人間はそれらに作用される。だが、多くの場合、それを重視していない時に起こるのである。〔……〕彼らはひらめきを受けたと感じ、実際そうなのだが、それは超自然的な神の力によるのではなく、細心の並外れた注意深さによるのだ。⁽²²⁾

ここで重要なのは、注釈者がこの説明を「合理的 (理性的)」と見なしていること、そしてデイドロにおいて、こうした「はかなく、瞬間的で、微妙なもの」が「超自然的な神の力」と混同されていないことである。理性「主義」への疑問は、理性自体の否定ではない。またそれは、他の知の在り様を統一的に語ることも異なるのではないだろうか？ 本書が目指すのは、理性に対して非理性を、あるいは啓蒙に対して反啓蒙を対置することではなく、理性による認識を越えるものを、人間がどのように捉えようとしてきたのかを問い、そして理性の周

縁にある——おそらく豊饒な——ものに目を向けることである。

*

本書は、二〇二二年に信州大学で開催したシンポジウム「アンシャン・レジームから近代へ、そしてその先へ——文学と哲学」での発表をもとにした論考集である。このシンポジウムでは、「十八世紀に終止符を打った革命と続く近代を通してのみ意味をなすような、十八世紀の目的論的な読解を避けること」、「従来、『啓蒙』と呼ばれてきたもの以外の要素に触れること」の二つをテーマに掲げた。それぞれの論考をささやかに紹介したい。

ミシェル・ドゥロン氏の「繊細さという概念」は、アルバン・ミシェル社から刊行された『繊細さの原則』(Le Principe de délicatesse: Libérinage et mélancolie au XVIII^e siècle, Albin Michel, 2011. 邦題『アンシャン・レジームの放蕩とメランコリー』)から十年を経て、あらたに書かれたものである。「繊細さの原則」とは、獄中のサドが夫人に宛てた書簡の中の文言であり、ロラン・バルトも『サド、フリーエ、ロヨラ』の中でこれに注目をした。だが「繊細さ」とはサド的な用語というだけのものではない。パスカルによる「幾何学的精神」と「繊細さの精神」の対比に遡り、ロマン主義の時代まで、数学的視点も取り込みつつ、その言葉が意味するものに迫っていく。十八世紀における幾何学に対する微積分学の位置づけ、無限小つまり「零」への限らない収束、そして「何かわからぬもの」や「ほとんどないもの」に向けられる繊細な眼差しについて語る。

「スピノザ哲学から十八世紀の唯物論へ」は筆者が著した。十七世紀に自由主義者たちによってフランスに持ち込まれたスピノザ哲学とその解釈の食い違い、あるいはスピノザ哲学と啓蒙時代の唯物論との間の齟齬が、いったい何に由来するものなのかを考察した。とりわけ「無限から有限への変状」というスピノザの発想は、當時もつとも理解を得られなかった部分である。現代的視点から見れば、そこには個物が発生する瞬間——零でな